

戦国時代農民の経済生活 (上)

佐藤 武敏

一 序

三 尽地力の教について

五 平糶法について (以下次号)

二 李悝と尽地力の教との関係について

四 農民の経済生活について

六 戦国時代農民の社会的性格について

一

戦国初期魏の国の文侯 (445-396B. C.)⁽¹⁾ に仕えていた李悝^{りかい}が尽地力の教という農政に関する説をとなえたことが「漢書」食貨志上に見える。「漢書」食貨志の記載はきわめて簡単であり、おそらく李悝の説の全部ではなくして、重要な部分だけを記すにとどめたものと思われるが、それによると李悝の説は二つの部分から成立っている。その第一は農業生産力の増大をねらった尽地力の教であり、第二は穀価の調節を意図した平糶法^{へいてきほう}という政策である。そして李悝は第二の平糶法の内容を説明するに先立つて当時の農家の一年の收支決算を具体的に数字をあげて説明している。周知のようにいわゆる先秦時代の経済史関係の史料はきわめて乏しいのであり、この意味では「漢書」食貨志が果たえる李悝のことばは当時の農業経済を研究するにあたつてすこぶる貴重な史料の一つであると考えられる。李悝その人の伝記については不明な点が多く、また尽地力の教と並んで李悝の代表的な業績と称される法経⁽²⁾という刑法の設定については、戦国時代の李悝によつてつくられたと考うべきではないという疑問がだされているが、少くとも尽地力の教に関しては、「漢書」食貨志の記載は何かもとずくところがあつたのではないかと考え、「漢書」食貨志の記載に信頼をよせている研究家が今日かなり多い。

しかしながら、この「漢書」食貨志の記載に対しても疑問をもっている研究家がないわけではない。その場合均しく「漢書」食貨志の李悝のことばに対する疑問といつても分析して考えてみると、次の二つに分けることができると思う。第一に尽地力の教や平糶法といった政策が果してほんとうに戦国時代の李悝によつてとなえられたものであるかどうかということ、第二に「漢書」食貨志の記載は当時の社会経済の実態をとらえたものであるかどうか、また李悝の主張は単なるペーパー・プランではなく、充分現実性をもつたものと考えてよいかどうかということである。第一の点については、たとえば仁井田陞氏は近年「世界歴史事典」⁽³⁾の李悝の項のところで、「民に土地の開拓を教えて増産を図り、穀物の価格の騰貴と低落とを調節して消費者と生産者との両金を図つたと伝えられる。しかし、その伝えには漢代のつけたしが多いらしく、彼の伝記は必ずしも明らかではない……」とのべておられ、李悝の尽地力の教および平糶法には漢代にいたつてつけ加えられた部分が多いとみてられるようである。第二の点については、古く服部宇之吉博士は、「豊凶共に收穫遞減の割合過大に失する疑有り、且つ豊年に買い上ぐる額の計出法にも疑点有り……」⁽⁴⁾といつて、平糶法の現実性に対して疑問を挾まれておるし、また牧野巽氏は、李悝による農家経済の数理的な分析はすべて仮定——といつても普通の標準からは著しくはずれた仮定であるとは考えられないが——にもとずいたものであると解してられる。⁽⁵⁾

拙稿においては「漢書」食貨志に見える李悝のことばを中心に戦国時代における農民の経済生活を問題にしてみようと思うのであるが、「漢書」食貨志の記載について右のような疑問があるとすれば、当然まず予備的な操作として「漢書」食貨志の記載に対する史料批判が試みられなければならないであろう。そこで私はその史料批判を次の二つの点から試みようと思う。すなわちまず尽地力の教および平糶法は「漢書」食貨志のいうように戦国時代魏の国の李悝がはじめてとなえたものと考えてよいかどうかを廣く「漢書」食貨志以外の史料にもあたつて検討してみること、次に「漢書」食貨志がつたえる尽地力の教および平糶法の内容を細かく分析して考え、果して仁井田氏のいわれるように全部を戦国時代のものとして取扱うべきではなく、中には漢代のつけたしとすべきものがかなり多いとしなければならぬかどうかを究明する

ことである。これらの点について史料批判を試み、さらに進んではいぬゆる李悝の説に見られる農民の経済生活の様相、およびそれら農民の社会史的性格などを考えてみようとするのが拙稿の目的である。

二

李悝の代表的な業績としては前述のように尽地力の教の主張と法經という刑法の設定とがあげられる。ところが後者の刑法の設定は「漢書」刑法志にも記載が見えず、「晋書」刑法志にいたつてはじめて魏の文侯の師である李悝が諸国の法を撰次して法經六篇をつくつたこと、およびその法經の簡単な内容紹介が記されている。そこで貝塚茂樹氏は「漢書」の著者班固が見た李悝の書には法經が李悝によつてつくられたという明文はなかつたのであり、李悝法經説は漢の儒家的な阜陶作律こうように対して魏代に起つた法術的な律縁起説と考えられることを詳細に論証しておられる。⁽⁶⁾ところが錢穆によれば「晋書」刑法志の李悝に関する説は桓譚かんたんの「新論」にもとずいたものであることを指摘し、かつ桓譚は前漢晩期の人であるが、揚子雲や劉子駿と並んで非常に博学な人であつたから、桓譚の説にも必ず何か根拠があつたのにちがいないとしている。⁽⁷⁾このようにして李悝法經説の根拠は前漢晩期まで溯らさせられるにいたつたが、それ以前のことは今のところ明らかになつていないといえよう。それでは尽地力の教についてはどうか。李悝の尽地力の教の内容を紹介しているのは「漢書」食貨志上だけである。ところが尽地力の教の内容は記されていないが、「史記」にすでに尽地力の教に関する簡単な記載が見える。すなわち「史記」孟子荀卿列伝には

魏有李悝尽地力之教、

と見え、また貨殖列伝には

当魏文侯時、李克務尽地力、

と見え、平準書には、

魏用李克尽地力為彊君、

と見える。以上三つの記載でまず第一に問題となるのは、孟子荀卿列伝では李悝となつてゐるのに貨殖列伝および平準書では李克となつてゐることである。それで李克と李悝とは果して同一人であるのか、もしくは別個の人であるのかということが古くより論議されてきた。「史記」の記載をみると、いずれも魏の国の人としており、またいずれも地力を尽すことを主張した人としており、「史記」は李悝と李克を同一人と考えていたとされるかも知れない。が、それは元来別人であるのに「史記」が混同したのであるという説もある。たとえば「史記」索隱では地力を尽す教を主張したのは李悝であつて、李克といつてゐるのはすべて誤りであるとしてゐる。また「漢書」においては明らかに李克と李悝とを別人と考へてゐたようである。すなわち「漢書」芸文志は儒家のところ

李克七篇

子夏弟子、爲魏文侯相

と記しており、また別に法家のところに

李子三十二篇

名悝、相魏文侯、富国強兵

と記してゐる。つまり李克・李悝いずれも魏の文侯の相となつたとしておりながら、李克の方は儒家系統に属し、李悝の方は法家系統に属すとしてゐる。李克と李悝とが別人であることをもつとも明確にあらわしてゐるのは「漢書」の古今人表である。そこで班固は秦以前の代表的な人物を上上・上中・上下・中上・中中・中下・下上・下中・下下の九つのグレードに分けてゐるが、李克の方は中上におかれてゐるのに対して李悝の方は上下におかれてゐる。こうした「漢書」の説と同様に李克と李悝とを別人となす説は今日なおかなり有力である。たとえば服部博士は「韓非子」などの先秦諸子文献に見える李克に関するつたえを検討した結果、李克には法家者流の面影が乏しく、また経済に長じていたとも考えられないことから、尽地力の教をとなえたのは李克ではなく、李悝であるとしてゐる。ところが清朝の学者崔述の「史記探源」は、「悝克一声之転、古音通用、非誤也」といつて、李悝・李克は同一人であることを主張し、錢穆氏なども崔述の説に賛成してゐる。私もこの説をとりたい。おそらく「史記」においては同一人とされてゐたのが、班固にいたり当時李克七

篇と李子三十二篇という別個の思想系統に属すと思われる書物がそれぞれつたわつていたために李子三十二篇の著者を李悝とし、李克・李悝別人説をうちだすにいたつたのであろう。が、錢氏もいつているように商鞅の場合でも法家に商君二十九篇が見えるし、また兵家に公孫鞅二十七篇が見える。それで漢代の思想系統の分類からみて別系統に属すと考えられる兩種の書物でも場合によつては著者が同一であると考えても必ずしも不合理だとは思われない。

史記に見える李悝・李克の尽地力の教に関する第二の問題は、史記の記載に何か根拠があつたのであろうかということである。このためには史記以前の諸資料に見える李悝・李克についてのつたえを検討してみる必要がある。まず「呂氏春秋」恃君覽驕恣篇に魏の武侯が臣下の中で自分の考えに及ぶものはいないと自慢したのに対し、李悝は楚の莊王がかつて群臣の謀が自分に及ぶものないために自分が滅びるのではないかと心配した故事を引いて諫めたことがつたえられている。これとほぼ同様な形のつたえが「荀子」堯問篇ぎやうもんと「新序」雜事一に見えるが、「荀子」や「新序」は李悝ではなくして呉起のこととしている。郭沫若氏はあるいは「呂氏春秋」の著者が書き誤つたのかも知れないが、「呂氏春秋」の著者の時代と李悝の時代とはそうかけ離れていないし、李悝にもこうしたつたえがふさわしいような一面があつたためであると解されている⁽⁸⁾。とすればこのつたえに見られるように李悝には儒家的な色彩があつたと考えられる。そしてこうした李悝観と結びつけることができるのは、「漢書」芸文志儒家のところに見える李克七篇であろうと思われる。

次に「韓非子」内儲説上によれば、李悝は魏の文侯のとき上地の守となり、人々が弓射に上達することをのぞみ、令を下して射がよくあたるかどうかによつて訟獄をきめようとした。そこで上地の人はすべて射を練習するにいたり、後に秦との戦いに秦を大敗せしめることができたとつたえられる。また同じく「韓非子」外儲説左上には李悝がちよつとしたトリックをもつて軍門の警備たちをはげましたが、警備たちはしまいにトリックになれて李悝を信用しなくなつたためにかえつて秦にうちまかされてしまつたということがつたえられている。これらのつたえによれば、李悝は文侯時代軍事方面のしごとを担当したことがあるようであり、またそういう方面に関して何かユニークな智慧なり術なりをももち合せてい

たのではないかと考えられる。ところで「漢書」芸文志の兵権謀家のところに李子十篇というのがのせられている。清朝の学者沈欽韓^{しんきんかん}によればこの李子とは李悝のことではないかという。前にあげた「韓非子」のつたえなどを参照して考えれば、この沈欽韓の推定は決して的はずれではないといつてよいであろう。

それでは「史記」や「漢書」に見える農政家としての李悝はほかの資料に記載があるであろうか。李悝・李克についてはほかに「呂氏春秋」離俗覽適威篇、漢代に入れば「史記」魏世家・同孫子呉起列伝・「新序」・「説苑」・「淮南子」^{えなんじ}・「韓詩外伝」などの諸資料に別個のつたえが記されているが、それらいずれにも農政家としての李悝・李克はあらわれてこない。といつて司馬遷が何ら根拠もなしに尽地力の教を記したとは思われない。おそらく漢代に「漢書」芸文志に見えるような李子の書がつたわつており、司馬遷もその書を見たかもしくは知つていたにちがいないと思われる。おそらく司馬遷はそうした書物によつたものであらう。なおまた「漢書」芸文志の農家のところに「神農」二十篇がつたえられている。そしてその書は唐の顔師古が引用している劉向^{りゅうきやう}の「別録」によると李悝および商鞅の説いたものではないかとしている。「神農」二十篇が果して李悝および商鞅の説いたものであるかどうかは問題であるが、李悝が戦国時代の代表的な農政家の一人であるという説が単に司馬遷や班固によつていわれただけではなく、漢代かなり一般的のものであつたということだけは確言できるところ。ところで司馬遷および班固が李子の書にもとづいて李悝の尽地力の説のことを記したとすると、問題は李子の書が一体どういう性質のものかということ、つまりその書はほんとうに李悝によつて著わされたものであるのか、あるいは李悝の名に仮托されたものであるのかということに帰着する。先秦の文献にははつきりでてこないが、漢以降の諸資料には李悝の法家的な面がつよくうきだされてくることからして、李悝に法家的な面もあつたのではないかと考えられる。といつて李子の書につたえられていたであらうと考えられる尽地力の説が李悝その人によつてほんとうに記されたものとするについては私は多少疑念をいだいている。むしろ漢代の「史記」および「漢書」以外に尽地力の教について何ら記載がないということや戦国諸子には自著とされるものがきわめて少ないということが近年の文献批判的

研究の進展によつて明らかにされてきている結果などを考えれば、李子の教は李悝の名に仮託されてつくられたものとした方がよろしいように思われる。そして戦国時代の魏国においてそうした仮託が行われるような農政が実際行われたのではないかとも考えられる。たとえば桓譚の「新論」には

魏三月上祀、農官誦法、

と見える。農官がどういう法を読んだのか明らかではないが、ともかく魏の国において国家の指導のもとに農業が強力に押し進められたのではないかと推定される。こうした魏の国の農政がもととなつて尽地力の教といったものが生まれたのではないか。もしもこのように考えてよろしいとすれば、李子の書は李悝自身によつて著せられたものではないかも知れないが、また仮空的に書かれたものでもなく、戦国時代の魏の国の農業政策もしくは魏の国と同じ傾向に属すると考えられる国の農業政策を背景にして生まれたものと考えてみてはどうであろうか。が、こうした考えで不合理な点はないといきれるためにはさらに「漢書」食貨志がつたえる尽地力の教の内容をばそのデテイルにわたつて検討してみなければならぬ。

三

「漢書」食貨志記載の李悝の農政は通常尽地力の教と総称されるが、厳密にいうと第一節でのべたように尽地力の教と平糶法との二つから成立つてゐる。最初の尽地力の教とは一体どういう主張であるのかを次に「漢書」食貨志の原文によつてみよう。「漢書」食貨志には

是時李悝為魏文侯作尽地力之教、以為地方百里、提封九万頃、除山沢邑居、参分去一、為田六百万畝、治田勤謹、則畝益三升、不勤則損亦如之、地方百里之増減、輒為粟百八十万石矣

と見える。この文には若干分りにくい箇所もあるので、まずそれらの箇所を明らかにする必要がある。第一は提封ということばである。李奇の説によれば提というのは率のこと、提封とは四封の内を率げることだというが、王念孫は「廣

雅」の説を引いて提封とは都凡すなわち大凡のこととしている。次に三升という数字が不可解である。すなわち、畝ごとに三升増収があるとすれば六百万畝の田土からは十八万石の粟の増収しかない。ところで全増収額は百八十万石となつてゐるので、臣瓚^{しんさん}は三升の升は誤りで斗としなければならないといつてゐる。おそらく臣瓚の考証は妥当であると思われる。食貨志の原文中不明な箇所をこのように解して全文の意味をのべると

このとき「戦国時代」李悝は魏の文侯のために地力を尽す教というのをつくつた。それはかりに方百里の地域をとつてみると、その面積はおおよそ九万頃となる。その中、山沢と邑居とが三分の一をしめるものとしてそれを除くと、可耕田が六百万畝となる。もし勤勉にかつ注意深く田を治めると、一畝ごとに三斗の増収となり、もしそうでないとやはり三斗の減収となる。だからこれを方百里の地域について考えると、穀粟の増減は百八十万石となる。いうことになる。

ところでこの「漢書」の説明でもつとも問題となるのは田土の生産力を高める方法である。「漢書」はそれについて「治田勤謹」としか説明してゐない。「治田勤謹」ということは Swann 女史の英訳によれば、“If the land was diligently and carefully managed,……”⁽⁹⁾とされている。私もそれと同様に「勤勉にかつ注意深く田を治めると」と解した。が、もしそれだけの意味であるとする、それは単に労働のし方に関する問題であり、それだけで果して畝当三斗の増収が可能かどうかは疑わしいのである。そこでいろいろの推定が行われるわけであるが、まず考えられるのは農業技術の面における改善ということである。この農業技術の改善としては次の三つの方法が問題となる。第一は深耕易耨であり、第二は施肥であり、第三は休閒田の常收田化である。李悝の尽地力の教は主としてこれら三つの農業技術の面における改善にもとづいて田土の生産力を高めることであると解してゐる説がある。⁽¹⁰⁾ところがこれに対し第一の深耕易耨は一種の尽地力だが、これは「孟子」梁惠王章句上などに見えるもので、李悝のとは異なるし、また施肥としても後に李悝が農家の経済を分析しているところには肥料費が見えない。ところが「孟子」離婁章句上に草萊を辟く^{ひらく}ということが見え、こ

これは単に荒蕪地を田畝とする意味ではなく、草萊とは「周礼」地官遂人のところに見えるように休閒田で、李悝はただこの草萊を休養させないようにしたのであると解する説もある。⁽¹¹⁾が、周礼に見えるような休閒田の制度が先秦時代果してほんとうにあつたかどうか疑問であり、また李悝の説の中に単位収量の増大以外に耕地面積の増大による收穫の増大をも含ませることができるとか疑問である。第一の深耕易耨や第二の施肥については「孟子」、「荀子」などに記載があり、戦国時代にかなり普及していたことが考えられる。李悝の尽地力の教というものが何か独自の方法にもとづいたものとするれば、深耕易耨や施肥とはまた別個の技術であつたと考えねばならないが、尽地力の教というものがむしろ戦国時代の一般的な農政を背景として生まれたものであるとすると、尽地力の教における生産力増大の具体的な方法としてはやはり「治は農民の勤労意欲をよびおこし、そして労働量の増加をはかることにあつたと考えねばならないであろう。事実当時の農民の労働量は経済的な条件によつてかなり変動があつたようで、それは次の平糶法を説明しているところで穀価が安い場合は農民の経済生活が困窮し、したがつて「不勸耕之心」が生ずるのだといつていふことにより明らかである。したがつて当然単に尽地力の教だけではなく、さらに穀価を調節するところの平糶法の提唱が必要になつてくるのであろう。もちろん以上は尽地力の教の文を文字通り忠実にうけとつた場合で、もし当時の生産力増大の一般的な条件をここに適用することが妥当とすれば、やはり前述の農業技術の改善をあげねばならないし、また後にふれるように土地の私有化に伴う勤労意欲の増加というようにも考えられるであろう。

さて次にこの尽地力の教の時代であるが、これについてはそこで用いられている度量衡がもつとも問題となると思われる。その中里・頃・畝は先秦時代の文献にすでに見えておるので問題はないが、粟百八十万石の石という単位が問題となる。たとえば石に対する伊藤東涯の説をみると、「石はもと權の名にて、物の輕重をはかるものなり、量目ますの名にあらず、書

経五子之歌云、関石和鈞と、是を斛の事にすること、唐にてもしれがたい、秦の始皇衡石程^{はかる}書^をと云は、訴状を秤にてかけるをいふ、一石の重さの事なり、ますの事にあらず、しかるに漢の時、万石君と云、中二千石と云の類は、米粟のますめのことなり、しかればこの時分より秤の名を量の石に借り用ゆるなるべし、想ふに、石の重さにあたる粟米を石と云より通用すると見へたり、しかれどもたしかにしれがたし⁽¹⁾としてゐる。また東涯は沈存中の「筆談」で一斛を一石としてゐるのは漢代からすでにそうであつたという説、さらに秦の始皇が六国を平定したとき、衡石丈尺を一にすと書かれてゐるが、その中の石は鈞石の石ではなく、後世斛をもつて石とするのはこのときからはじまるのではないかという「大学衍義補」の説を紹介している。清朝のすぐれた考証学者であつた顧炎武もその著「日知録」卷十一漢祿言石のところで、漢が秦の制度をうけついでに始めて石をウェイトの単位としてではなくキャパシティーの単位として用ゐるようになったことを考証している。このように石がキャパシティーの単位に用ゐられるようになったのは秦漢以降とする説が圧倒的に有力である。たしかに先秦の文献で穀物の単位としては斛を使用することが一般的なようである。が、春秋戦国時代における穀物のキャパシティーの単位は龠・合・升・斗・斛に一定していたわけではなく、齊の国では豆・区・釜・鍾が用ゐられていたことは「左伝」昭公三年のところに見える。それで秦が石を斛と同じように用ゐる以前にどこかの国でそうしたことを行つていたところがあつたのではないか。前に引いた「日知録集釈」漢祿言石のところで趙翼が注して、李悝の説のほか「管子」禁藏篇や「戦国策」などに石をキャパシティーの単位として用ゐているのがある例からして、春秋戦国時代からそうであつたとしている。趙氏のあげる例のほか「管子」の別の篇、「墨子」、「韓非子」などにも若干見られる。たとえば「韓非子」内儲説上には一石の赤菽と見え、また「韓非子」定法篇に五十石之官、百石之官と見える。そこで戦国時代どこかの地域、おそらく西北方の諸国を中心に石をキャパシティーの単位として用ゐることもあつたのではないかと考えられる。したがつてこの点では必ずしも尽地力の教に漢代の材料が混入したと解さなければならぬことはないであらう。

通常平糶法と呼ばれる穀価調節策を説明する前に、穀価と關聯して農民の經濟生活を数理的に分析して考察した結果が「漢書」食貨志につたえられている。その部分を次に引用すると

又曰、糶甚貴傷民、甚賤傷農、民傷則離散、農傷則國貧、故甚貴与甚賤、其傷一也、善为国者、使民毋傷而農益勸、今一夫挾五口、治田百畝、歲收畝一石半、為粟百五十石、除十一之稅十五石、余三十五石、食人月一石半、五人終歲為粟九十石、余有四十五石、石三十為𡔷千三百五十、除社閭嘗新春秋之祠用𡔷三百、余千五十、衣人率用𡔷三百、五人終歲用千五百、不足四百五十、不幸疾病死喪之費、及上賦斂、又未与此、此農夫所以常困、有不勸耕之心、而令糶至於甚貴者也。

となつてゐる。この文で意味の不明な箇所はほとんどないようである。そこでこの文の史料的な性質さらに進んではこの文に見える農民の經濟生活の特色などを明らかにするためそのデテイルに立入つて検討を試みなければならぬ。

(1) 家族形態。この文に見える農民の家族形態はまず五人家族という大きさになつてゐる。すでに戦国時代の諸記録に同じ大きさの家族が見えてゐる。ただ問題となるのは、戦国時代のほかの記録には五人以外の大きさの家族形態もつたえられてゐることから五人家族というのとは一体どういふ社会的階層に属するののかということに関して論議されてきた。宇都宮・牧野氏らによればこの五口の家は中流典型であつたとされるの⁽¹³⁾に對し、守屋氏は下層農民であるといわれる。⁽¹⁴⁾成程守屋氏の指摘されてゐるように「孟子」尽心章句上に

百畝之田、匹夫耕之、八口之家、足以無飢矣、

と見えるし、同じく「孟子」萬章章句下には

耕者之所獲、一夫百畝、百畝之糞、上農夫食九人、上次食八人、中食七人、中次食六人、下食五人、

と見え、八口の家が上層に属し、七・六口が中層に属し、五口は下層に属すとなつてゐるようである。また「礼記」王制

によれば、上農は九人、その次は八人、その次は七人、その次は六人、下農夫は五人となつてゐるし、「呂氏春秋」士容論上農篇では上田夫は九人、下田夫は五人、「周礼」地官小司徒では上地の家は七人、中地の家は六人、下地の家は五人となつてゐる。中以上については以上の諸資料の記載に数字の相違が見られるのが若干あるが、いずれも五口の家は下農夫の大きさであるとしてゐる。が、守屋氏らが注目されていない資料にこれとまた異なつた記載があることを見逃してはならない。たとえば「管子」乗馬数篇によると、管子のことばとして

有一人耕而五人食者、有一人耕而四人耕者、有一人耕而三人食者、有一人耕而二人食者、……と見えるし、また同じく「管子」揆度篇には

上農挾五、中農挾四、下農三、

と見え、むしろ五口の家族は上農であるとされている。「孟子」、「礼記」、「呂氏春秋」、「周礼」などの記載と「管子」の記載との間の喰い違いをどう解するか問題であるが、おそらく家族の標準的な大きさは地域によつてまた時代によつていくらかの差が實際存しており、それが以上のような記録の相違となつてあらわれてきたものでないかと思われる。それで李悝の場合はどうであるかというにたしかに一年の收支決算は欠損となつており、経済的には困窮してゐるという結果がだされているが、しかし、「漢書」食貨志によるとそれは魏の国にもつとも普遍的に存在してゐたと考えられる農民の経済生活を取りあげたものだと思われる。一体下層農民とか中流典型農民とかいうことばはかなり曖昧であり、経済的に欠損をだしている——といつても毎年の穀価のいかにによつて変動があることは食貨志の文から当然予想されるが——農民を下層農民とすれば、李悝の場合も下層農民であるかも知れないが、ある国においてもつとも普遍的に存在してゐるという意味では中流典型農民とも考えられるであらう。ともかく漢代にはかなり一般的であつたと考えられる五口の家族がすでに戦国時代魏の国などにおいて普遍化しつつあつたのではないかと推定される。ただ戦国時代と漢代の資料を

比較してみると、李悝においては「一夫挾五口」といつているのに漢代の資料たとえば「漢書」食貨志に見える晁錯ちようそのことばによれば「其服役者不下二人」となっている。また「孟子」萬章章句下は「一夫」尽心章句上は「匹夫」として李悝と同じようになっているが、「周礼」では「下地家五人、可任者家二人」となっており、晁錯のことばに近い。そこで李悝系統の資料と晁錯系統の資料では家族構成の点で相違があるのかどうか問題となってくる。晁錯のことばにおける「服役者」を顔師古のように公事の役に服する成年の男子とすると、五口の中に成年男子が二人以上存在しなければならぬ。が、これは実際の情況としてはすこぶる困難である。それで牧野氏は漢代に女子が農耕、土木事業、軍事などに用いられた例を引用して漢代女・子供も農耕に従事したとされる。こう解することが妥当とすれば、李悝と晁錯との間には家族構成の相違というのを想定しなくともよいであろう。先秦時代においても「一夫」つまり成年男子は一人とされているが、女子も農耕に服する場合もあつたと考えられることについてはたとえば「管子」度地篇・輕重己篇などの資料が存している。李悝の「一夫挾五口、治田百畝」は後にもふれるが、家族五口を率いる家長の所有管理にかかるところの經營地百畝というように解するのが妥当で、この一夫は實際農耕を担当する人をあらわしたものでないであろう。それで李悝の場合と晁錯の場合とで家族構成において重大な差はなかつたのではないかと考えられる。

(2) 所有田土面積と畝当收穫量。これについて李悝は所有田土面積が百畝であり、また畝当收穫量は一年一畝一石半、したがつて全体で粟百五十石を收穫するとしている。所有の主体が何であつたか問題であるが、すでに周代から田土面積が百畝を単位としていたという説が「孟子」滕文公章句上・梁惠王章句上、「周礼」地官大司徒・遂人そのほかに見えるのはあらためて指摘するまでもないであろう。その後のこととしては「荀子」大略篇や「管子」山權数篇・臣乘馬篇・輕重甲篇にも田土面積の単位として百畝が見える。また魏の国のこととしてはたとえば「漢書」溝洫志こうきよくし（「呂氏春秋」先識覽樂成篇にもほぼ同様のことがつたえられている）に

史起進曰、魏氏之行田也、以百畝、鄴独二百畝、是田惡也、……

と見える。史起はさらに漳水を用いて鄴を灌漑しない西門豹を非難している。が、加藤繁博士は「史記」河渠書および「後漢書」安帝紀などを引いて西門豹が漳水を引いて鄴を灌漑することがあつたとし、史起の西門豹に対する非難は事実でなく、「呂氏春秋」の作者の作為にかかるものとして⁽¹⁵⁾いる。ただ秦のはじめにおいて一般に田百畝を分ち、特殊の場合にはこれを倍給したことは認めておられる。物語自体の真偽には多少疑念があつても土地制度には何かもとずくところがあつたと考えられるし、またそれを加藤博士のように秦のはじめにもつてこなければならぬことはなく、魏のこととしてうけとつても差支はなからうと考えられる。さらにこうした百畝の土地は漢代の記録にもあらわれる。たとえば前にふれた晁錯のことばに「其能耕者、不過百畝」と見える。とすると先秦時代より漢代にかけて百畝を一つの単位とする田土経営がかなり一般的に存在していたのではなからうかと思われる。問題はそうした田土の経営形態である。李悝の場合について郭沫若氏は「十批判書」の中で土地は依然国有であること、また尽地力の教に「地方百里、提封九万頃」と見えることからなお井田制の痕跡を保存していることを指摘し、しかし、当時の農民は生活が独立し、奴隷の段階をぬけていゝとしてゐる。「奴隷制時代」でもその見解は変つてゐない。ところが加藤繁博士は戦国時代土地公有はやぶれたが、古来の惰力で多数の農民は百畝づつ所有したものであらうとされ、⁽¹⁶⁾また西島定生氏も李悝の場合を家長の所有管理にかかる経営地百畝という意味にとつておられる。⁽¹⁷⁾これは重大な問題であつて別に詳細な論証を必要とするが、戦国時代には一般的にいつてすでに土地公有制が崩壊していた頃と考えられるので、李悝の場合は西島氏のいうように家長の所有管理と解されるであらうし、したがつて李悝の説の農民は独立自営小農民であるといえるであらう。また晁錯の場合の百畝は「其能耕者、不過百畝」とあつて、可耕力の限度として百畝があげられており、その所有形態は明らかでないが、こうした農民の中から「売田宅、鬻子孫」というのも⁽¹⁷⁾あらわれてくると見えることから考えればやはり農民自体の所有にかかるものと考へねばならない。

さて次に畝当收穫量を検討せねばならない。李悝は畝当收穫量一石半とし、したがって百畝の田土からは百五十石の粟の生産となるとしている。これと比較すべきは「管子」の記録である。「管子」には種々の收穫量が記されており、山権数篇では高田は十畝に十石、中田は十畝に五石、庸田は十畝に三石とされているから、高田であつて畝当收穫量一石である。禁藏篇にもこれと同じく「畝取一石」と見える。ところが軽重甲篇には「百畝之收不過二十鍾」と見え、一鍾は六石四斗とされるから、二十鍾は百二十八石にあたり、畝当收穫量は一・二八石となる。また「管子」治國篇には「常山之東、河汝之間……中年畝二石、一夫粟二百石也」と見え、常山（山東諸城県の南）の東、河汝の間では普通の年で一畝二石の收穫とされる。さらにまたこれは特別であろうが、「管子」輕重乙篇には「河游諸侯畝鍾之國也」と見え、これは河辺の沃野を領した諸侯は一畝に六石四斗の粟を収めるとされる。つまり「管子」においては一石、一・二八石、二石が普通の收穫量として考えられていたのではなからうか。次に秦漢時代の畝当收穫に関する記録を上に表示してみよう。

畝当收穫量	出典	備考
一石	「漢書」食貨志上	晁錯の上奏文による
三石	「前漢紀」卷七	右に同じ
三石	「後漢書」仲長統伝	「昌言」損益篇よりの引用
四石	「史記」河渠書	河東守番係の墾闢事業により五千頃より二百万石以上收穫とされる
四石	「淮南子」主術訓	
六・四石	「史記」貨殖列伝	
六・四石	「史記」河渠書	鄼國渠の開鑿によつて毎畝一鍾の收穫とされる
十九石（美田） 十三石（中田） 十石（薄田）	「汜勝之書」	「齊民要術」卷一に引用されている

上の表で問題となるのは、「汜勝之書」の記録と「漢書」の記録である。「汜勝之書」のはあまりに多すぎるが、これは武帝時代の改制にしたがつて二四〇歩一畝で計算されており、旧畝に換算すると美田七・九石、中田五・四石、薄田四・二石となるとされる。これに対し「漢書」食貨志のは少なすぎる。ところが荀悦の「前漢紀」の記録は「漢書」と同じく晁錯の上奏文によりながら百畝で三百石、すなわち畝当收穫量三石としている。そこで「漢書」と「前漢紀」とどちらが妥当であるかということになる

が、これについて宇都宮氏は「漢書」の一石説を妥当としているのに天野氏は「前漢紀」の三石説を妥当とし、漢書の百石は三を脱落したのではないかとしている。⁽²⁰⁾ 両者の食い違いの主な原因の一つは武帝時代の地積単位の改制に対する理解の仕方にある。宇都宮氏は晁錯の文を改制以前の旧畝によるとし、それを改制後に換算すると百畝は四一・七畝ぐらゐになるという。ところが「後漢書」仲長統伝のは改制後のによつていゝとし、晁錯の場合四一・七畝から三百斛の收穫があるのにそれより時代が下つた仲長統の場合は百畝から三百斛の收穫となつてゐるのは何ら史料的に理由づけることができないとしている。これに対し天野氏によれば、武帝の時の地積単位の改制は荒地・二荒地などの開墾によつてその地が新たに升科される場合適用されたものであり、既有的の課税耕地の地積はそのまゝ旧制が保存されたものとし、「汜勝之書」が新らしい畝で計算された以外「漢書」「前漢紀」「淮南子」「後漢書」いづれも旧畝によつたものとしている。そして天野氏は戦国時代のと比較して「前漢紀」の方を妥当としているのである。私は天野氏の説をとりたい。そして李悝の・五石は漢代の諸記録よりは「管子」などの記録に近いことから李悝の畝当收穫量は戦国時代の標準量であつたのではないかと思うのである。そして以上のことによつて戦国時代から漢代にかけて農業生産力が次第に増大していつたことがうかがえると思うのである。李悝の説に見える農家の収入としては一年百五十石の粟が唯一のものである。これに対して支出としてはいくつかの項目があげられてゐるので次に支出を各項目ごとに検討してみよう。

(3) 税。李悝があげてゐる税としては十一の税がある。そしてそれは全部で十五石となつてゐるから明らかに一年の総收穫の十分の一である。十一の税は前項の百畝という田土面積と同じく周代からすでに存在してゐたとつたえられる税法である。有名な「孟子」滕文公章句上のことばを改めてここで引用するまでもないであらう。春秋戦国時代のこととしては「論語」顔淵篇、「孟子」告子章句下、萬章章句下、「荀子」王制篇そのほかに什一の税のことが見える。が、それはいずれも思想家たちが什一の税をもつとも適正な税法であることを主張してゐるもので、實際ある国において什一の税が行われたということを示すものではない。しかし、たとえば「孟子」告子章句下では白圭が二十分の一税を主張したの

に對し、孟子は十分の一税が適正であることを辯護しているから實際十分の一税が行われたことがあつて、しかもそれが一部の人のよつて高率とさえ考えられたことが推定される。

次に漢代の田税はどうであつたろうか。「漢書」食貨志にのつてゐる董仲舒こうちゆうじよの上奏に「至秦則……或耕豪民之田、見税什五……漢興、循而未改」と見える。これは顔師古もいつてゐるように田土を所有しない貧農がその田土の所有者に支払ねばならない税額であるが、それが什分の五という高率になつてゐる。国家の田租については孝景二年田租を三十分の一にしたこと（「漢書」食貨志）や武帝のときやはり三十分の一にしたこと（「塩鉄論」未通篇）がつかえられてゐるが、これらは国家の財政がとりわけ豊かであつた場合の特別の措置のようで、一般的にはもつと多かつたにちがいない。王莽のときのことばに「漢氏減輕田租、三十而税一、常有更賦、罷痿咸出、而豪民侵陵、分田劫假、厥名三十、實什税五也」（「漢書」食貨志）と見える。国家の政策として三十分の一税を規定したことがあつても、實際は豪民によつて收奪されて十分の五税になつてゐたとされる。また居延漢簡によると六十五畝の田土からの田租が廿六石だつたという記録が見える。⁽²¹⁾これは屯田地の場合で、田租は国家に支払われるものであるが、これによると十分の四税になり、国家の田租もかなり高率に上つたことがあることがわかる。こう見てくると、李悝のつたえる十分の一税は先秦時代のものとしてうけとつた方がよいのではないかと思われる。

(4) 穀物消費高。これについて李悝は一人一月一・五石としてゐる。五人家族で一年とすれば、全部で粟九十石の消費量となるわけである。穀物の消費高は元来そう顕著な相違はない筈であるが、ところがこれに反しいろいろな記録が見られる。たとえば「管子」国蓄篇には

大男食四石、……大女食三石、……吾子食二石、

と見える。漢代の記録では「塩鉄論」散不足篇や崔寔の「政論」によれば普通男子一ヶ月の穀物消費量は三斛とされ、また居延漢簡に見える毎月の穀の配給量は十五才以上の男は三石三斗三升少、女は二石一斗六升大、十四才より七才迄の男

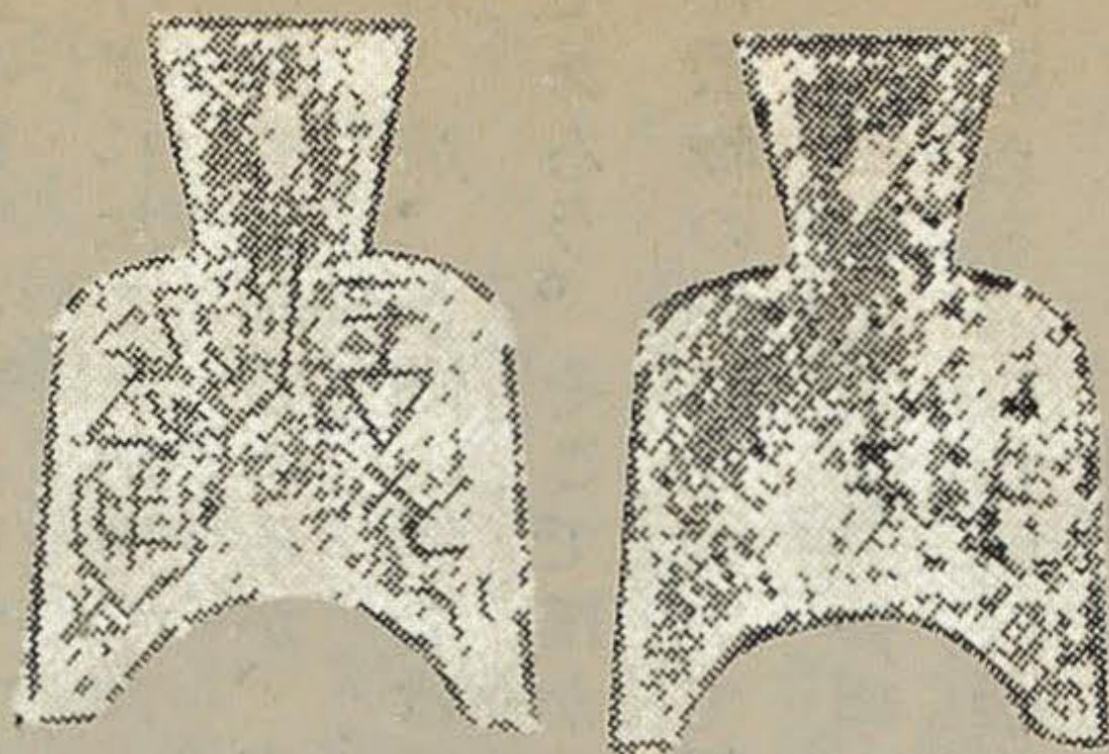
は二石一斗六升大、女は一石六斗六升大、六才以下の男は一石六斗六升大、女は一石一斗六升大であつたとされる。以上の資料に比較してひとり李悝のだけがあまりに少なすぎる。一体どうしたわけであろうか。宇都宮氏は「李悝の時代と漢代との、マスの単位のちがいと考えなければならぬ」としておられる。もし宇都宮氏がいわれるようにマスの単位の相違があつたとすれば、当然消費量だけでなく、收穫量も問題となる。もしマスの単位の相違を認め、李悝の消費量を漢代のと近ずけると、收穫量においても李悝のがもつと増加して漢代の畝当三石に接近する。マスの単位の相違というのはこの意味で非常に重要な問題だと思ふのであるが、遺憾ながらそれを実証する資料がない。だが宇都宮氏のいわれるように穀物消費量からみてどうしてもマスの相違を考えねばならないとすると、李悝のつたえはおのずと漢代ではないことがいえるであろう。李悝の收穫量、消費量が漢代のと実際かなり差があつたのか、もしくはマスの単位の相違を考慮に入れて換算すると実際はそう相違がなかつたのかということは今後さらに研究の余地がある。

以上十一の税と穀物消費量とがまず当時の主な支出であり、そしてそれらは現物の量で計算されている。ところがそのほかにもいくつか支出の項目がある。しかし、それらはいずれも錢貨で換算されている。そこで錢貨支出を検討する前に貨幣流通と粟価の問題をしらべてみる必要がある。

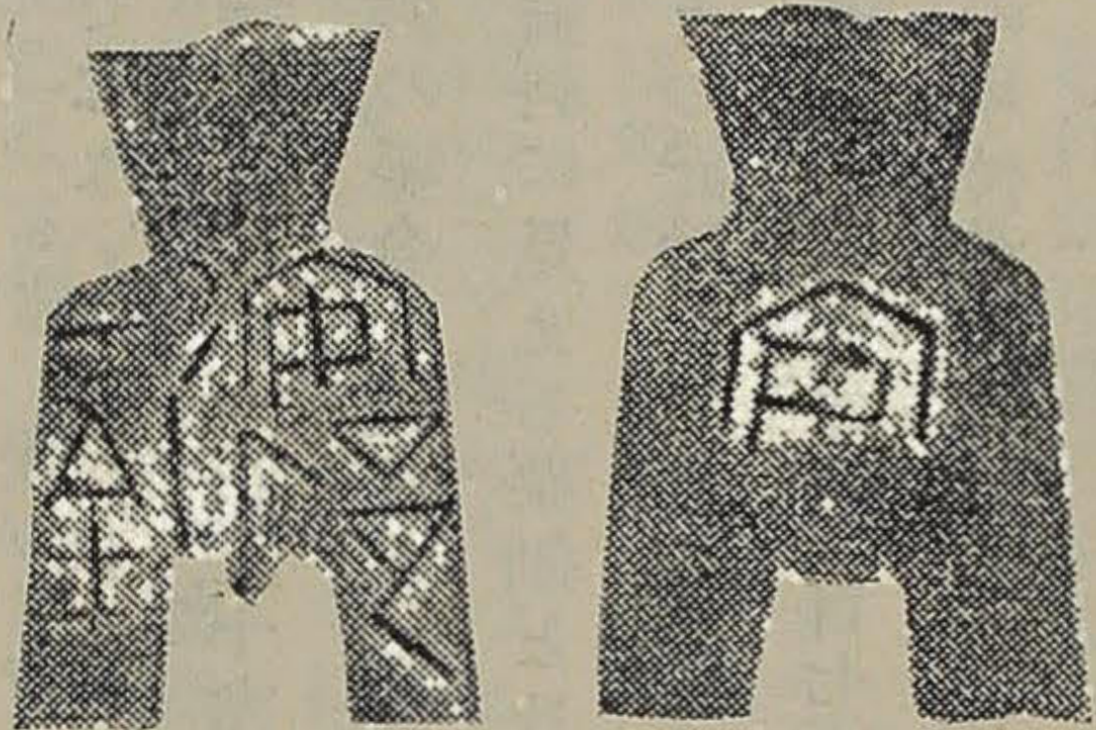
(5) 貨幣の流通と粟価。中国において貨幣が一般的に使用されはじめるのは春秋戦国時代からで、とくに戦国時代に入りさかんになつてくるのが通常認められている。今日戦国時代の貨幣がかなり多くつたわつておるので、当時の貨幣をきちんと研究することができが、当時の貨幣に四種の形態があつたことが明らかになつている。(a)は斉式で、刀の形をなしており、(b)は晋式で、錢^{のうぐ}鐔の形をしており、布と呼ばれる。(c)は楚式で、乾豆腐の形をし、(d)は秦式⁽²²⁾で、円形方孔であり、半両の二字が鑄られている。戦国初期には第二の晋式の流通範囲がもつとも廣かつたようであり、晋を中心とした地域は早くから貨幣経済が発達していたと考えてよいであろう。魏の貨幣はこの晋式に属するものであるが、この魏の国あたりが戦国初期における貨幣経済のセンターの一つであつたと考えられる。というのは魏の都安邑で発

行された布があるが、この布はいわゆる円肩方足布に属し、形態の点で布の中ではかなり進んだもので、流通に便利になつていふと考へられる。またとくに注意されるのは安邑で発行された布には安邑何銖という字がきざまれており、またその種類として安邑半銖、安邑一銖、安邑二銖の三種があることである。銖は斤であり、重量をあらわす単位である。このように貨幣に重量が表示されるのは安邑発行の布の前後からはじまるようである。そのことは貨幣制度が一段と進んできていること、また貨幣の使用が一層普及していることを示すものではなからうか。さらに注意しなければならないことはこ

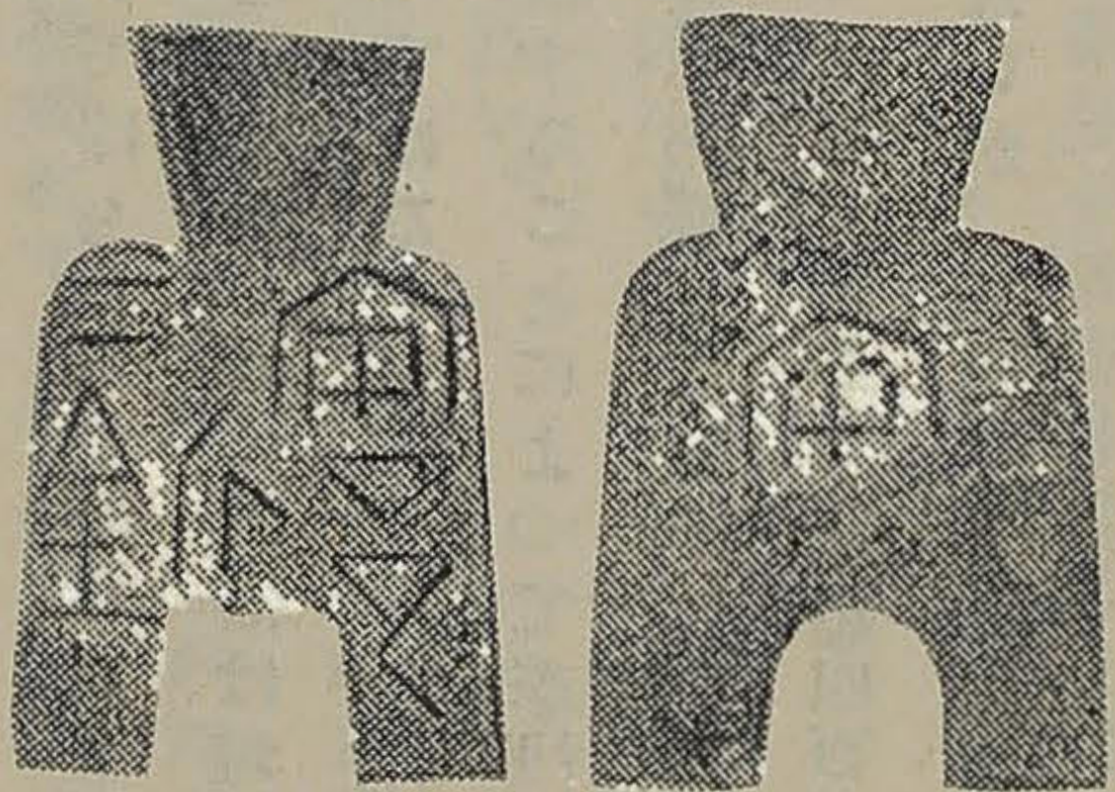
安邑半銖



安邑一銖



安邑二銖



(日本銀行貨幣標本室所蔵)

でもいくらかの差があることがわかつた。ということは安邑一銖、安邑二銖がすでに名目貨幣化していたと考へられるし、こうした点からも安邑地方の貨幣經濟の發展が推察されるのである。「孟子」滕文公章句上には許行という農家派に属する人の經濟生活をつたえた一文がのつており、それによると許行はその冠や釜甑や鉄製農具などを粟と交換したとされる。これはバーターであつて、孟子のつたえでは農民たちまで貨幣が浸透したかどうか疑わしめるものがある。ところか

李悝のつたえる農民はすでに貨幣を使用することになつていたのでこの点孟子と李悝とでは大きな相違がある。が、前にも述べたように魏の国において貨幣経済が非常に進んでいたことから農村まで浸透していたことは考えられないこともない。「孟子」のつたえは許行一派の特殊な生活にもとづいたものか、李悝のつたえとは地域が異なつてゐるのかとも解されよう。ただ李悝のつたえで問題となるのは何_レ^{（二）}_レ^{（一）}_レという単位である。一般的には先程のべた（a）の秦式すなわち円形方孔の貨幣を_レ^{（二）}_レといつてゐる。が、_レ^{（一）}_レとは元来農具のことで、農具錢_レ^{（二）}_レに形をとつたのが布であるとされるから、布も_レ^{（一）}_レと呼ばれたことがあつたのではないか。これについてはもつと当時の貨幣制度を研究してみる必要がある。

次に粟価であるが、李悝の説には一石三十_レ^{（二）}_レと見える。この粟価は地域や豊凶などの条件によつて変動し易いものである。が、李悝の場合は特殊の場合を例にとつたのではなく必ずや平年作の場合を念頭においての粟価だとみて間違いないであろう。そこでほかの資料に見える粟価と比較することによつて李悝の粟価の性質をさぐることにしたい。まず「管子」に穀物の価格について種々の記録が見える。すなわち軽重戊篇に

魯梁之人糴十百、_レ^{（二）}_レ糴十_レ^{（一）}……_レ^{（二）}_レ糴三百七十、_レ^{（一）}糴十_レ……_レ^{（二）}_レ糴四百……_レ^{（一）}糴十五

と見える。これには穀物の単位量が示されていないが、通常一斗と解されている。これにもとづいて一石に換算して次に表示すると

国名	穀価	国名	穀価
魯・梁	百 _レ ^{（二）} _レ 𥽿	楚	四十 _レ ^{（一）} 𥽿
齊	一 _レ ^{（二）} _レ 𥽿	趙	一・五 _レ ^{（一）} 𥽿
萊・莒	三十七 _レ ^{（二）} 𥽿		

となる。また軽重乙篇には

滕魯之粟、釜百、

と見え、軽重丁篇には

齊西之粟、釜百泉（一_レ^{（二）} 𥽿）……齊東之粟釜十泉

と見える。釜は第三節でみたように古くは齊の地方を中心とする量目とされ、

四升が一豆、四豆が一区、四区が一釜、十釜が一鍾とされる。したがつて一釜は六斗四升となる。これを石に換算して右

の輕重乙篇、輕重丁篇の粟価を示すと、滕、魯では一石が五六・四𥽿位、齊の西部はこれに同じ、齊の東部は十五・六𥽿となる。これらは輕重戊篇のと同じ地域においても若干の変動が見られる。また地域が示されない資料では輕重甲篇に粟賈平則四十、

と見え、平は通常釜の誤りとされる。したがつて一釜四十𥽿を一石に換算すると六二・五𥽿となる。同じく輕重甲篇に百畝之收、不過二十鍾、一農之事、乃二金之財耳、

とも見える。一金は四千𥽿であるから二金では八千𥽿である。これに対し二十鍾は百二十八石であるから前と同じように一石六二・五𥽿となる。それから豊凶によつて穀価が変動することは国蓄篇に

歲適凶、則市糶釜十緡、

と見える。十緡^{きよう}は千𥽿であるから、一石千五百六十四𥽿位になる。

このように「管子」には地域によつてまた豊凶によつて穀価にかなりの変動が見られるが、輕重戊篇の萊・莒地方は一石三十七𥽿で、これが李悝の三十𥽿ともつとも近い。

次に漢代の穀価であるが、これについてはいろいろ研究がだされている。とくに^{ろうかん}勞幹氏は漢代の文献だけではなく、得意の漢簡なども使用して漢代の穀価をだしているが、それによると米価は石万錢にいたつた場合も稀にはあるが、大体高くとも二千𥽿をこさず、安いときは数𥽿に下つたときもある。が、通常の市価からいうと、前漢時代は米価は百𥽿、穀（粟）価は七八十𥽿、後漢時代はこれよりいくらか高く、米価は二百𥽿、穀価は百𥽿であつたという結論⁽²⁵⁾をだされている。これらにくらべると、李悝の三十𥽿は安い。おそらく李悝の粟価に関するつたえは漢代の粟価を背景にして生まれたものではないであろう。

さて李悝は総収入百五十石から十一の税十五石と家族の自家消費高九十石を差引いて残り四十五石を石三十𥽿の割合で換算して千三百五十𥽿という手許保有の金高をだす。そしてその金高からさらに次のような現金支出を計上するのであ

る。

(6) 社間嘗新春秋の祠の費用。これが李悝では年三百𦵑が計上されている。社間嘗新春秋の祠とは王先謙の補注では次のように解されている。社間の祭は土神を里門にたて、里人が一緒にこれをまつること、嘗新は薦（新穀をそなえるまつり）春は祈年のまつり、秋は取入れのまつりとされる。このような村落における諸種のまつりの経費は村落の各農家によつて分担されたことが明示されているのである。以上のまつりの中社は村落団体の守護神とされ、その本体は時代や地域によつて変化したたが、殷代から漢代にいたる迄重要な役割を果してきたとされる。漢代農民が財貨を醸出して社をまつるうとしたことについては、「史記」封禪書に

高祖十年春、有司請令県常以春三月及時臘祠社稷以羊豕、民里社各自財以祠、制可、

と見える。また居延漢簡には⁽²⁶⁾

買芯冊束束四𦵑給社、

入秋社錢千二百元鳳三年九月乙卯□、

と見え、漢代においても村落民の負担において社のまつりが行われたことがわかる。したがつて李悝の祭祠費用三百𦵑の時代についてはそれだけではわからない。ただ「史記」封禪書の記録では有司の奏請によつて里社の祭祠が行われるようであり、農民が毎年自発的に祭祠を行うものであるかどうかは疑わしい。これに対し李悝の場合は毎年の経常費として一農家がその総収の十五分の一を負担するよう記されている。蓋し李悝の場合の村落はすでに血縁的な共同体が崩壊し、三族制さらには単家族により「周礼」などに見えるおそらく二十五家位を単位とする地域団体を構成していたものであるうが、そうした団体結合の紐帯として社神が重要な意味をもつており、村民の自主性において毎年経常的にそのまつりが行われたものと考えられる。

(7) 衣料費。李悝によれば一人一年の衣料費は三百𦵑となつており、五人では千五百𦵑となるわけである。衣料費につ

いてはほかに記録があまり見当らない。それだけにこの資料は貴重である。一体戦国時代以前の農民の衣料はどういうようにして獲得されたかというに詩経ひんぷう豳風七月の詩に

七月流火、九月授衣、一之、日躔しん、二之、日栗烈無衣褐、何以卒歲、

と見える。郭沫若氏はこの詩に見える曆法を手掛りにこの詩の時代を春秋時代の中葉以後にもとめている。郭氏はそしてこの詩において農民が一定のユニフォームを与えられること、とくにこの詩では九月に冬の衣服を与えられることを注意している。⁽²⁷⁾が、馬瑞辰の「毛詩伝箋通釈」によれば、「周礼」の典婦功を引いて「授」というのはすべて授けてつくらせる意味で、七月の詩は女子に絲麻を授けてつくらせることだとしている。郭氏の説をとれば、衣服は各農民に与えられるということになつてゐる。ところで李悝の場合は、農民は各自賤貨でもつて購入せねばならないことになつてゐる。つまり古く国家や共同体に隷属していた時代の農民は、衣類を支配者によつて支給されるか、または自給することになつてゐたと考えられるが、李悝の場合農民は独立自営農民となつてゐること、貨幣經濟が農村に浸透してゐること、さらに衣料製作の手工業者が独立しかけてゐることなどによつて農民は自分の計算によつて衣料費を負担せねばならなくなつてきてゐることがうかがえると思う。郭沫若氏の説をとつて七月の詩を春秋中葉以降とし、李悝の説を戦国初期にもつてゆくと、春秋時代から戦国時代にかけて農民の經濟生活にかなりの変化が生じてゐることがうかがえる。また「管子」国軌篇の

泰春功布日、春縑衣、夏单衣、裨ひ籠累る箕勝ふ屑糗、若干日之功、用人若干、無貲之家、皆假之、械器勝ふ簞屑糗公衣、功已而歸公、衣（衍字か？）折券、

というのを見ると、資力のない家には官より衣類その他を貸し、用がすんだら返還するという制度がつたえられている。これがいつ頃の資料かはつきりしないが、これと李悝の説を比較すると、李悝の場合衣料費は自分の負担に計上されてゐるから決して資力のない家を想定してゐるのではなく、独立自営農民を想定してゐることは明らかであろう。漢代農民の

衣料費については資料が見あたらないが、居延漢簡には前漢晚期河西地方に派遣された軍人の衣服費が見える。それによると李悝の場合よりはずつと種類も多いし、また比較にならぬ程高額⁽²⁸⁾の費用を用いている。その中もつとも安いものの一つとして帛布単衣一領三百五十二²⁸銭というのが見える。この地方は特別物価が高いということも考えられるが、それにしても単衣だけで三百五十二²⁸銭も要する。そのほか縑衣なども入ると、いくら農民の衣料としても、李悝の場合ように一年一人三百²⁸銭では済まないであろうと考えられる。

ともかく現金支出としてはまづりの費用と衣料費の二つがあげられている。これは經常費の性質をもっているようである。このほか臨時の支出としては李悝によつて、不幸疾病死喪の費用と臨時の賦歛とがあげられているが、金高はもちろんあげられていない。そしてこうした臨時費を除いて收支決算をやつた結果缺損が四百五十²⁸銭になるという。

以上李悝の説に見える農民の経済生活をそのデテイルにわたつてそのほかの資料と比較検討してきたが、その結果それは大体戦国時代のもの、国は明らかではないが、魏乃至はそれと同傾向の経済的狀態にあつた国におけるつたえをもととしてでき上つたものと考えて支障はないと思う。もちろんそこにえがかれている農民は標準的な農民で、またその收支も代表的な項目について平均的な数字をあらわしたものであり、現実はいろいろな点で若干の食い違いがあることは充分予想されるところである。が、決してひどく現実を無視したものではなかつたろうと考えるのである。

註 (1) 戦国時代の年表は「史記」六国年表を基本的資料とするが、この六国年表は粗雑であり、多くの点で訂正を要する。が、その

訂正についてもいろいろの説があり、魏の文侯の即位期間に関して近年の代表的研究を見てみると、武内義雄博士「六国年表訂誤」

(「諸子概説」所載)は 424 - 387 B.C. とし、錢穆氏「先秦諸子繫年」は 446 - 397 B.C. としている。私は陳夢家氏の「六国紀年表」(「燕京學報」三十四期所載)の説にしたがひ 445 - 396 B.C. とした。

(2) 貝塚茂樹氏「季悝法経考」(「東方學報」京都第四冊所載) 参照。

(3) 「世界歴史事典」第十九卷。

(4) 服部宇之吉博士「李悝の経済政策及刑法制定に就きて」(「支那研究」所載)。

- (5) 牧野翼氏「漢代の家族形態」(「支那家族研究」所載)。
- (6) 貝塚氏 前掲論文参照。
- (7) 錢穆氏「先秦諸子繫年」四魏文侯札賢攷参照。
- (8) 郭沫若氏「十批判書」前期法家的批判の章参照。
- (9) Nancy Lee Swann: "Food and Money in Ancient China" p. 138.
- (10) 天野元之助氏「中国農業の展開」(「アジア研究」所載)
- (11) 服部博士前掲論文参照。
- (12) 伊藤東涯「制度通」卷十。
- (13) 宇都宮清吉氏「漢代に於ける家と豪族」(「史林」第二十四卷第二号)、牧野翼氏 前掲論文、
- (14) 守屋美都雄氏「漢代家族の型体に関する試論」(「史學雜誌」第五二編第六号)
- (15) 加藤繁博士「支那古田制の研究」参照。
- (16) 西島定生氏「漢代の土地所有制」(「史學雜誌」第五十八編第一号)
- (17) 「漢書」食貨志上。
- (18) 河汝は王念孫によれば河海かとされる。天野氏前掲論文参照。
- (19) 宇都宮清吉氏「僮約研究」(「名古屋大學文學部研究論集」所載)
- (20) 天野氏前掲論文参照。
- (21) 勞幹氏「漢簡中の河西經濟生活」(「歴史語言研究所集刊」第十一本所載) 参照。
- (22) 前掲 Swann 女史の「漢書」食貨志英訳十・十一頁所載王毓銓氏作成の "Coin Type Distribution" 参照。
- (23) 図参照。なお同貨幣の調査については日銀貨幣標本室の郡司勇夫氏にお世話になった。厚く謝意を表する次第である。
- (24) 加藤繁博士「錢の語が貨幣を意味するに至りたる理由に就いて」(「支那經濟史考証」上所載)
- (25) 勞幹氏「居延漢簡考釈考証」卷一。
- (26) 前掲「居延漢簡考釈考証」卷二。
- (27) 郭沫若氏「由周代農事詩論到周代社会」(「青銅時代」所載)。
- (28) 前掲「漢簡中の河西經濟生活」参照。

(未完)